

スポーツ少女にみるジェンダー

—— 1970年代と2000年代のマンガ比較による ——

堀 籠 美 佳*

序章

現代は女性ができないスポーツはなくなってきた、あるいは従来女性の種目であったスポーツを男性もするようになってきた時代ともいわれる。スポーツにおける男女の差異はなくなってきたように思える。一方で、「スポーツに男女差があるのは当たり前」「筋力も体格も違う男女に差があるのは当然のこと」多くの人がそんな思い込みを持っているのではないだろうか。かくいう私もその中の一人だった。

この矛盾はどうして生じてくるのだろうか。そのひとつの答えは、スポーツの中の“生物学的な差”ではなく、“社会によって不当に作られた差”，つまりジェンダーにあるように思われる。「ジェンダー最後の砦」(井谷, 2004, p. 20)といわれるほど、スポーツほど過度に2つの性に固執しているものではなく、またステレオタイプの男性と女性の役割や行動を強化しているものはない。

本論文ではこのスポーツの中のジェンダーを、とても身近な素材“マンガ”を使ってわかりやすく紹介し、その問題に迫る。中でもスポ根少女マンガを取り上げたい。なお、ここで私がいうスポ根とは「スポーツ」と「根性」を合わせた造語であり、ひたむきにスポーツに取り組むマンガ作品などを主に指す。また、少女マンガとは主に少女を主人公とし、若い読者を対象として描かれているマンガのことである。『スポ根少女マンガ』とは、この両方の性質をあわせもった作品のことを指すとする。

スポーツをする女性に求められるイメージや行動とは何か。また、マンガがスポーツをする少女を主人公として描き出すようになった1970年代から30年の間に、スポ根少女マンガというジャンルはどう変わったか。またなぜそのように変化したのか。以上の点に着目しながら、1970年代と2000年代のマンガにおけるスポーツ少女の表象を分析し、比較し、考察していきたい。

*指導教員：酒井朋子

続いて章の構成を紹介する。一章ではまずジェンダーとはなにかということ述べる。「セックス」「ジェンダー」「セクシュアリティ」の違いから、ジェンダーの何が問題とされているのか、ということを見ていく。またステレオタイプの男らしさ女らしさがどのようなものかなど、既存の文献を用いてまとめる。続いて2節では、スポーツとジェンダーの関係をみる。特に、女性アスリートが、メディアなどによって男性アスリートよりも二流として扱われやすいということに着目する。そして3節ではこれらのスポーツ・ジェンダーを扱ううえで、なぜマンガと言うメディアを取り上げるのかということについて触れる。数あるメディアの中でも、より人々に影響を与えるものとしてなぜマンガがあげられるのか、その意義を考える。また本論文では70年代から2000年代のスポ根少女マンガに着目するため、少女マンガ全体の歴史的推移も紹介する。少女マンガの最盛期から今にかけて、どのような傾向がみられたのか、そして少女マンガ独特のコマ構成の特徴などを理解しておくことは、スポ根少女マンガの分析にも役立つだろう。

二章では70年代のスポ根少女マンガに焦点をあてる。ここでみられるのは、伝統的な女性役割のイメージとスポーツをする少女たち自身との関係である。また男性コーチと女子選手の能動―受動の関係によって、女子選手たちのプレイが自分の身体の限界だけでなく、女らしさのイメージを超えるものへと変化する様子を見ていく。他には、同性の上級生からのいじめなど、女同士の戦いや確執などが特徴的に描かれていることなどについても分析していきたいと思う。

三章は2000年以降に描かれた作品を取り上げる。なお、ここで扱うマンガ作品は少女マンガだけではなく、スポーツをする少女を主人公としたマンガも含む。二章では優しく助けてくれる存在であった男性が、三章では威圧的な態度であったり厳しかったりという描写がよくみられる。ここではこの男集団というホモソーシャルな場へ飛び込む少女について述べていきたい。最後に終章では二章、三章を比較した結論をまとめ、スポーツ少女を扱うマンガを通して、現代社会におけるジェンダーという問題の何がみえてくるのかを考察したい。

第一章 スポーツ・ジェンダー学を、マンガを使って読み解く

1-1 この章の目的

本章ではスポーツとジェンダーについて研究する多くの研究者の文献を用いて、本論文の理論的基盤を明確にする。まず基本的なジェンダーの概念をジェンダー学の文献を参考にまとめる。日本社会の中の身近な男らしさ女らしさが私たちにどのような影響を与えているかということを考える。続いてスポーツという特定の分野におけるジェンダーの問題をまとめ

る。その際参考にするのはスポーツ・ジェンダー学についての本に加え、メディアという視点でスポーツとジェンダーをとらえた文献である。多くの人が目にするスポーツは、メディアを介しているものが主流であると考えられるからだ。また、メディアほどジェンダーを明確に二分しているものはないと考えるため、重要な参考文献のひとつとして取り上げる。

最後に、本論文のテーマとして“マンガ”を扱うのはなぜかということ論じる。テレビや雑誌など数あるメディアの中でもマンガはどのような点で有効な資料となるのか。マンガは人々にどのような影響を与えているのか、また逆に人々はマンガに何を求めているのか。これらのことをマンガ学について研究する文献を用いてまとめる。最後に、本論文では主に少女マンガを取り上げるため、少女マンガの歴史の変遷も簡単に紹介する。

1-2 ジェンダー学とは

まずジェンダーの意味について考えたい。飯田貴子によると、1960年代に起こった第2派フェミニズムによって、性は「セックス」「ジェンダー」「セクシュアリティ」の3つに分けられた（飯田，2004，p.11）。「セックス（sex）」とは「生物学的・解剖学的な性別」であり、生まれた時からもうすでに決められている性である。「ジェンダー（gender）」とは社会的に作られた性差であり、生まれた後に徐々に形作られていくものである。育児や家事は社会的に定められた性役割であり、女性たちはこの役割を社会のなかで学んでいくのである。この概念により、それまで女性の生物学的宿命と考えられていた家庭役割から女性たちが解放された。そして3つめの「セクシュアリティ（sexuality）」とは、「性に関わる欲望と観念の集合」のことであり、これもセックスとは異なるものとして定義された。人間は異性を愛し、性的対象とするものだという考えは、本能的なものではなく、社会によって形成されたとした。この考えは、異性愛だけが正常なものだという固定概念に異議を唱えることになったのだ。

それまでは男女の社会的役割も、異性愛だけが正常という概念も、すべて「自然」なものとして生物学的な性の中にまとめられていた。それが、ジェンダーやセクシュアリティという考え方によって、多くの人の多様な生き方が可能になるはずであった。しかしジェンダーやセクシュアリティが生物学的なものではないとしても、社会にはすでに形成された固定概念が存在するため、人々はなかなかその概念から抜け出すことができない。そして今でも、男は男らしさ、女は女らしさに縛られ、同性愛は異質なものという眼でみられてしまう現状が続いているのだ。

現代社会において問題とされているのは、ジェンダーという性別にかかわる区別が、差別や排除につながっている場合があるということだと伊藤公雄は述べている（伊藤，2008，p.

13)。また、男だからこう女だからこうあるべきという固定概念が、結果その人にとって生きづらいものになってしまっていることも問題である。すべての男女の区別が悪いのではなく、社会的差別や排除につながるジェンダーの考えはやはり見直していかなければならないことだと伊藤は強調する。

また、伊藤はジェンダーとセックスは必ずしも相対立するものではないと述べている。ジェンダーは男と女の2つにしか区別されないが、セックスは多様性を持っている。例えば、男性器と女性器の両方を持ち合わせる半陰陽者（インターセックス）は、古代から存在していた。また、性染色体においてもXY染色体の男性とXX染色体の女性だけが存在するわけではなく、XYYやXXXなど通常の男性、女性よりも多くの染色体を持つ人もいる。また、ホルモンといった要素から考えてみても、必ずしも「男性」「女性」の2つだけに分類することはできないのだ。それに対し、ジェンダーは「男性」と「女性」の2つにはっきりと分けられてしまっている。このことから、セックスによってジェンダーが規定されているのではなく、ジェンダーという考えによって男女の間にグラデーションがあるセックスまでも男と女という2つにだけ限定させられてしまっているという考えが、1980年代後半から1990年代にかけて登場してきた。ジェンダーがセックスをも2つに分類してしまい、男女以外の性を見えなくしてしまっているのだ。

次に女らしさと男らしさについて考えたい。現代では男だからこうあるべき、女だからこうあるべき、という固定概念が以前よりなくなってきたように感じるかもしれない。例えば最近では肉食系女子や、草食系男子などの言葉に表れているように、恋愛において女性だからといって常に受け身でいるのではなく、自ら積極的に男性をリードする女性がいる。またその反対に、気弱でおくてでなよなよしている男性などがみられるようになってきた。上記のような言葉が広く世間に広まったことは、男だから女だからという概念を超え、それに縛られない性を人々が認め始めているとも受け取れるだろう。しかしそのような現代でも、男らしさ女らしさというのはやはり根強く生産されていると考える。

今日の日本は、男らしさ・女らしさに無意識のうちに縛られている社会だといえる。ジェンダーの制約が苦にならないのであれば、その人にとってはまったく問題ない社会である。しかしだれでも社会のステレオタイプのジェンダーに一度はぶち当たったことがあるはずだ。では、そのぶち当たるであろう女らしさ男らしさとは一体何であろうか。例えば女であることの損得について伊藤は女子学生へのアンケートをもとに次のように分析している。女であることで得をしたという回答の中には、「力仕事の時手伝ってもらえる」、「女性への割引、特別サービスがある」、「甘えられる」、「失敗をニコリ笑ってごまかし、泣いて握りつぶす」などの回答があった。これらの回答は一見得していることのように見えるが、実は女性は「弱

い]、「護られるべき対象」として見られているという実態がみえる。そしてそれは見方を変えると、「一人前扱いされていない」、「その地位を低いものとしてみなされている」といえるだろう。また、損をした回答の中には、就職や賃金などの社会参加における差別の問題、また痴漢やセクハラなどの性的対象とされてしまうことなどがあげられている。これらのすべての女性への視線というのは、男性主体の社会の影響がとても強いと考える。また、女性自身も自分の性に対し、社会から求められる存在であろうとすることでジェンダーのステレオタイプに縛られていると考えられる（伊藤，2008，p.93）。

中島梓は『コミュニケーション不完全症候群』という著書の中で、多くの女性にとって最も身近なダイエットの仕組みについて述べている（中島，1991，p.121）。中島は男の子より女の子は逃げ道がないという。太った男の子は嘲笑されるが太った女の子は迫害されるのだ。彼女たちは体重を減らしたいからではなく、「社会に受け入れられたいからダイエットをするのだ。それは時として自らを傷つけるような摂食障害や拒食症などの障害へとつながっていく。中島はこのように痩せたいと願う女性たちはダイエット症候群に陥っていると述べている。このようにダイエットをするように仕向けているのは、異常ともいえる細さをモデルケースとしてしまっている社会である。「女の子は痩せているべき」というジェンダーの強迫概念は女性にとって結果的に生きづらい社会となっているといえるのではないか。ジェンダーの規範は自分がどのような身体を持ち主でありたいか、という欲求にも影響しているのだ。

その欲求はスポーツをする少女にもあてはまると考えられ、特に70年代のスボ根少女マンガにはよく表れている。女性アスリートはスポーツをしながらも、常に女性らしい自分とそうではない自分との葛藤を抱えやすい。なぜなら、スポーツが基本的に男性性を表しやすいからである。スポーツで優秀な成績を残すためには屈強な身体でなければならない。つまり、がっしりした大きな身体が必要な場面が多く、筋肉も鍛えなければならない。他方でそれは、やわらかさ、壊れやすさといった「女らしい身体」のイメージとは正反対のものになってしまう、というジレンマが生じやすいのだ。そのため、スボ根少女マンガにおいてスポーツと同じくらいの比重で恋愛の要素を取り上げることは、男性性に近い面を持つ少女たちを女性性に戻すための作用を持ち合わせているともいえるだろう。

話を戻し、一方男性においても社会から求められる男らしさに縛られていると伊藤は述べている。そのひとつの例としていじめ自殺の問題がある。1980年代からのほぼ20年間の自殺のケースを整理すると、約8割強が男の子だというのだ。それというのも、小さいころから「自分の弱みを外にさらしてはいけない」、「感情を表に出してはいけない」というトレーニングを受けてきた男の子たちは、誰かと感情を共有しようとする女の子と違って、いじめ

にあったときにひとりで抱え込む傾向が強いのだ。また、大人になると、この「自分の弱みや感情をむやみに表に出してはいけない」という縛りは男性の中で一層強くなり、国際的にも注目を浴びた日本語の「過労死」に、結果的につながっていると述べている。そのような男性問題に対して異議を唱える運動がアメリカで初めて1970年代から開始された。具体的には、男だけに課せられる徴兵制度についてや、離婚の際の父親の養育権が確保しづらいことなど、男性差別だと思われる問題に対して運動が行われてきたのだ。確かに、男性だからといって自分の感情を押し殺す必要はないし、つらいことが我慢できるというわけではないだろう。また男性が社会に出て働き、結果家庭を省みないようになっていても、それは本当にその男性だけの問題だろうか。そのような事例がたくさんあるということは、社会全体がそう仕向ける構図になっていると言っても間違いではないだろう。このように、男性も女性同様ジェンダーの固定概念によって縛られているのだ。

1-3 スポーツとジェンダー

以上、社会におけるジェンダーについてのおおまかな意味と、社会における男らしさ・女らしさとその問題について見てきたが、次からはこの論のテーマであるスポーツにおけるジェンダーに着目したい。それにあたって、最も参考にするものは飯田貴子・井谷恵子によって編集された『スポーツ・ジェンダー学への招待』である。

飯田によると、近代スポーツは「性の多様性を否定し、一般、標準からはずれた特殊、下位の『女』を構築しつづけてきた」（飯田，2004，p.17）。先ほどセックスには男と女以外の性も存在すると述べたように、性にはグラデーションがある。しかし、スポーツにおいては男性種目と女性種目がはっきりと二分割されている。これをスポーツ・ジェンダー学の立場からみると、生物学的理由によって二分割されているのではない。さらに言えば「女性のスポーツを保護するためでもなく、近代スポーツにおける男性の優位性、ジェンダーの階層性を堅持するため」という見解がなされる（飯田，2004，p.18）。身体的な向き・不向きではなく、男性と女性間の社会役割の反映として、スポーツ種目は性別ごとにわけられている。実際にスポーツには男性らしいもの、女性らしいものが存在する。格闘技系や競争性のあるスポーツはより男性らしい「カッコよさ」を強調する。柔道やボクシング、レスリングなどがその代表である。一方表現系や競争性がないものはより女性らしい「かわいさ/キレイさ」を表す。競技性がないスポーツとは自分のポイントが直接相手にとってマイナスにならないものであり、例えばフィギュアスケートやバレエ、新体操などがそれに当てはまる。

また、スポーツの報道も「男らしさ」「女らしさ」をより強調するものとなっている。森田浩之は女性アスリートの描き方に対する批判を三つの点にまとめている（森田，2009，

pp. 95-96)。

まずひとつは、「女性アスリートの『幼児化』『性愛化』」である。これは男性アスリートに比べ、女性アスリートはファーストネームで呼ばれる頻度が高いことにある。例えば「卓球の愛ちゃん」や「フィギュアスケートの真央ちゃん」などがその典型的な例だろう。それに比べ男性アスリートではフルネームもしくはファミリーネームで呼ばれる印象が強い。ここからスポーツする女性アスリートが「かわいい」存在として世間に受け入れられていることが見て取れる。阿部潔はこの女性アスリートの性愛化について、魅力的なアスリートがすべて男性の視点で取り上げられていることを指摘している。男性アスリートの報道が、力強さや逞しさという「カッコよさ」を強調しているのに比べ、女性アスリートは愛らしさや優雅さなどの、「カワイイ/キレイ」という点に着目されがちである。これらのアスリートは男性女性ともに、万人から魅力的な存在として認識される。しかしその枠から外れるアスリート、例えば女の格闘家はカッコよくはあるが、決して魅力的な女とされることはない。スポーツ界の女性について鈴木守は次のように述べている。

女は、スポーツの世界での活躍が賞賛されはしても、ジェンダー的な意味で「女らしさ」の規範を兼ね備えていることが要求されます。スポーツ的には強くても、どこかかわいい女らしい部分を持っていることが重要とされるのです。そのため、スポーツにおいて強いだけの女は嫌われ、マスメディアによってバッシングの憂き目にさえあうことになるのです（鈴木, 2001, p. 221）。

1-1で、伝統的なジェンダー価値において女性は「護られるべき対象」であると述べたが、相手と対戦し、筋力のある逞しい肉体を求めるスポーツは、女らしさに反すると考えられる。実際に女子柔道のオリンピック選手がメダルを獲ったとき、メディアがその女子選手の女らしさを私生活に探すような報道をすることはよくみられる。このことはいくら女性がスポーツにおける肉体系や闘争精神での強さを持っていたとしても、その内面は女らしさを兼ね備えているのだ、という補足を世間に対して示しているかのように感じられる。そして活動的・筋力・強さというスポーツの要素は男のものであるということを再認識させる意味も持っているのだ。

続いて、森田の第二の批判は「女性アスリートとその業績の『周縁化』」である。これは男性スポーツに比べ、女性スポーツの報道の量が少ないこと、また報道されるものでは女性らしいスポーツに偏っていることがあげられる。女性らしいスポーツというと、先ほど述べたようなフィギュアスケートやバレエや新体操やなどの表現形のものや、相手との直接的な

接触のない、個々で競技をする種目のことである。

そして3つめに「女性アスリートとその業績の『矮小化』」である。これは、コーチや夫など「支える男」の影を一緒に報道することにより、その女性アスリートの実績が本人のものだけではないと示すことである。特に有能な女性アスリートを取り上げるとき、ことさらに私生活における異性愛の様子を報じるなどがある。飯田はここで、柔道の元田村亮子選手を例に挙げ、彼女の結婚などの報道に対する熱狂ぶりは、ジェンダーの差異化であると述べている（飯田，2004，p. 18）。このように近代スポーツのメディアは男性と女性をはっきりと分け、そしてスポーツにおける女性劣化を強調してきたといえるだろう。

以上で述べた森田浩之によるスポーツジェンダー批判は、いずれも身近なスポーツ報道に顕在しているものである。そして本論文において、この三つの批判は重要な検討点と成りえると考える。

1-4 マンガにおけるスポーツとジェンダー

私は以上のようなスポーツ・ジェンダー学を、スポ根少女マンガを題材に論を進めたいと考えている。そこで、なぜマンガを取り上げるのかということの説明しなければならない。

まず、ジェンダーは生まれた後から徐々に形成されるものであると最初に述べたが、では私たちはどのようにジェンダーを身につけているのか。ジェンダー形成には大きく分けて2つの作用があると考えられる。まずひとつが家庭や学校などの周囲との関係から教えられるものである。「男の子なんだから泣かないの」「女の子なんだからおしとやかにしなさい」など一見しつけのように思えるこれらの言葉は、結局はその社会のジェンダーの刷り込みである。そしてジェンダー形成のもうひとつの作用がメディアである。テレビや映画、雑誌や小説など身近にあるメディアもまた、その社会のジェンダーを伝達する重要な要素である。例えばCMであっても家庭用の日用品の宣伝は母親らしき女の人が出演しやすいし、また新車の宣伝では有名な俳優などが出てきたりする。CMはその商品のイメージを決定づけるものであるため、より万人に受け入れられるイメージ、つまりジェンダーのステレオタイプをより強調するものとなっている。このような周囲の身近な環境やメディアによって、私たちは自然とジェンダーを身につけているのだが、ここでは人間性に大きな影響を与えるものであると考えられるメディアについて着目したい。例えば、藤枝濤子の『絵本に見る女（の子）像・男（の子）像』は、まだ自分たちのジェンダーの概念がない子供たちに対して、いかに大人が「男らしさ/女らしさ」を強調しているかを描いている。彼女はまず絵本が子供たちに与える影響は非常に大きいと述べている。その理由は、

- (一) 幼児の時期に、
- (二) ストーリーの絵による視覚化をとおして具体的にイメージを伝達し、
- (三) テレビのような一過性ではなく、くり返しくり返し読まれることによって、

子どもの意識形成、自己イメージの形成に深く関与するからである（藤枝，2009，pp. 110-111）。

では具体的に絵本の世界は子どもたちに何を示しているのか。男の子が主人公のものでは冒険・発見・好奇心・創造性などが多く見られる。一方女の子が主人公のものでは静的で個性がなく、ロボットの動きで描かれると藤枝は述べている。幼い子がひとりだけでかける様子を描く絵本を比較してみても、その違いがみてとれる。例えばひとつは男の子が主人公の『たろうのおでかけ』（村上桂子さく・堀内誠一え，福音館書店）と、女の子が主人公の『はじめてのおつかい』（筒井頼子さく・林明子え，福音館書店）を比較する。前者の絵本の男の子は、道中、動物の仲間たちを従えて和気あいあいとしながら、元気はつらつで黄色信号にも突進するなどの勢いがある様子で描かれている。一方後者の女の子の絵本では、閑静な住宅街を進み、自転車がちよっと通っただけでも女の子が不安感を前面に出す様子を表している。そして途中おつりを忘れてたりなどの小さいハプニングを経て、最後に母親を見つけてやっと安心するというお話である。この2つを比較したとき、『たろうの…』の危険な外にも元気に進んでいく様子と比べ、『はじめての…』では外を怖がる女の子をととも閉鎖的に描いている印象を与える。他にも絵本の世界では、男の子が主人公として主体的に行動する一方で、女の子は男の子の引き立て役であったり、主人公であってもそのキャラクターは静的で個性がないものが多くあるという。このように、絵本はその社会で受け入れられている男らしさ・女らしさのイメージをうまく「伝達し、増幅し、そして補強する働き」をしている。ジェンダーがまだ形成されていない子どもたちにとって絵本は、ジェンダーの入り口と言っても過言ではない。絵本は、男らしさと女らしさのステレオタイプを刷り込むのに最も身近な存在といえるだろう（前掲，pp. 110-128）。

絵本は幼少期に大きな影響を与えるものであるが、思春期以降はマンガがその延長にあるものだと考えられる。絵本を卒業した子どもたちが次に出逢うのがマンガではないだろうか。また、マンガでは絵本には出てこなかった「恋愛」が出てくる。これにより、思春期には男女の社会的役割だけではなく、性愛の対象のステレオタイプや恋愛における男女関係の理想型が刷り込まれるのだ。

また、日本においてマンガは、子どもだけでなく、大人にまで、幅広い世代の人に受け入れられていると考えられる。大人になってもマンガを読み続ける日本人の姿に外国人が衝撃

を受けたという話があるように、日本ではマンガが文化の一部となっているのだ。思春期などの発達段階を経た後、大人になってもなお、人びとはマンガからジェンダー・イメージを受け取りつづけていると言える。

次に、マンガをメディア研究のひとつとして取り上げることの利点について、宮原浩二郎は次のように述べている。

まず、マンガは日常的に密着した身近なメディアであり、同一場面を他人とシェアしやすく、コミュニケーションが高い。(中略) 絵だけの美術、言葉だけの文学にくらべて、マンガは格段に具象性が高い(宮原, 2001, p. 29)。

確かに、マンガは他人とマンガの一シーンを共感しやすい性質を持っている。例えばテレビのバラエティで人気作品のマンガを取り上げ、名シーンのセリフを当てるクイズ番組や、いかにそのマンガが好きかをトークする番組などがある。これが映画や小説とは異なる点で、マンガはその一コマコマをじっくり見ることができるからであると考えられる。また、次のような利点もあげている。

さらに、他のメディアとくらべて決定的なメリットは、マンガが社会的・知的に権威づけされていないことである。マンガは「面白さ」を描いて売る娯楽商品として社会に存在している。(中略) そのため、マンガは社会常識や道徳からの自由度が高く、読者の「盲点をつく」破天荒な発想が表現されやすい(前掲, pp. 29-30)。

つまりこのことから、マンガはよりひとの自由な発想や欲望を表しやすいと考えられ、読手もそれをマンガに求めていると考えられる。そのため、人気マンガを題材に社会を考えることは、より多くの人の潜在的な欲望を考えることにつながっていくのではないかと私は考える。

続いて、マンガを読み解く方法として2つの方法があると宮原は述べている。ひとつはメディア論的方法である。これはマンガ全体をひとつのメディアとしてとらえ、「文学」「読み物」「映画」と違い、どのように取り上げられ扱われてきたかという研究である。マンガの全体的な歴史と現在のマンガの在り方を考えるものだ。宮原はこれを「〈マンガを読む〉ことを読む」と表現している。もうひとつは批評的方法である。メディア論的方法がひとつのマンガだけでなく、マンガ全体への関心がなければならないのに対し、批評的方法は具体的なマンガ作品の中身をみていき、作品の中に描かれる社会学的なテーマを研究していくもの

である。本論文は後者の批評的方法をとっていく。すなわちスポーツ・ジェンダー学という関心に基づいて、70年代から現在までのスポ根少女マンガがどのように描かれてきたかをみていきたいと考えている。

1-5 少女マンガの30年

ここでおおまかに70年代から現在までの少女マンガ全体の変化や歴史的推移をまとめておきたい。藤本由香里によると、少女雑誌は明治の終わり頃から存在していた。ただその頃の雑誌は小説などの挿絵、表紙絵としてのみ取り入れるものであり、ストーリー性のあるマンガが必ずしも主流ではなかった。そして戦後になり「少女マンガ」が本格的に描かれ始め、ストーリー性のあるマンガが次々と描かれていく。その中でもインパクトが大きかったのが手塚治虫の「リボンの騎士」である。男と女両方の心を持つサファイアを主人公にしたこのマンガは、その後の男装する少女など性別越境を試みる少女マンガの新しい境地を開いていくきっかけとなった。しかしこの頃の物語のモデルはお涙ちょうだいのものや、不幸に耐える少女を主人公にしたものが多かったと藤本は述べている。そしてこれが60年代後半になると、少女マンガは次第に「恋愛」をテーマにするものが多くなっていく。70年代になると、少女マンガの黄金期が到来する。今も読み継がれるようなマンガ、例えば池田理代子「ベルサイユのばら」や美内すずえ「ガラスの仮面」、山岸涼子「アラバスク」、山本鈴美香「エースをねらえ!」などの大作が次々と生み出されていった。また、この時期に少女マンガに高い文学性と革新をもたらしたのが“花の24年組”である。彼女たちは昭和24年(1949)前後に生まれ、1970年代に活躍した女性少女マンガ家たちである。彼女たちはそれまで少女マンガになかったSFや少年愛を描くなど、新ジャンルを切り開いていった世代である。

また、この時期は少女マンガのコマ構成にも変化があった時代でもある。増田のぞみは少年マンガとは違う少女マンガ独特のコマ構成の変化に着目している(増田, 2002)。60年代後期までは定型的なコマ構成が主流であった。定型的なコマとは四辺を実線で囲んだ長方形のコマを、間白(まはく、コマとコマの間の隙間)を挟んで並べる一般的なコマ構成のことである。この頃までは少年マンガと変わらないコマ構成になっているが、70年代になると少女マンガは独自のコマ構成を展開していく。それまでのきちんと四方を囲まれたものではなく、枠がないものや、コマとコマが重なり合っているものなどが出てくる。これによって同じページに描かれていても、過去と現在と空想の世界が交ざり合って描けるようになった。これにより、少女マンガはより深く少女の内面を描くことができ、深さを持った作品が生まれていったのだ。

少女マンガの推移に戻ると、90年代で大きく変わったのが、一般的には「恋愛」が次第

に物語の前面に出なくなったことだ。その関心の中心は「『自己』とその環境へと移り、主人公が仕事や表現分野での自己実現を目指す」ものや、「戦闘美少女」、「女性どうしの絆」など、「恋愛」以外のものへと広がっている。また一方で原点に戻るようなピュアな初恋ものなども描かれるなどその多様化が見て取れる（藤本，2009，pp. 35-41）。

こうした少女マンガ一般の傾向はスポーツを題材にした少女マンガではどのような変化としてあらわれているのか。次章からスポ根少女マンガの分析をすすめる。

第二章 伝統的な女性の性役割とスポーツ

2-1 問題提起

この章では1960年代後半から70年代までに描かれたマンガ作品をとりあげ、その特徴をみていく。中でも中心としてみていきたいのが、山本鈴美香が描いた『エースをねらえ!』（1973～1980）のマンガ作品である。数あるスポ根少女マンガ作品からこの一作を選んだのは、まずこの年代において発行部数は1,500万部にのぼり、他のスポ根少女マンガより抜きん出た人気を得ているからだ。さらに、2004年にはテレビドラマで実写化もされ、平均視聴率は13.22%を記録している（株式会社ビデオリサーチの調査による）。これは20%以上だと高視聴率といわれる中ではまずまず平均的な数字といえるだろう。さらに、20年も前の作品であることと、今のテレビ番組のチャンネルの豊富さを考慮すると、決して悪い数字ではない。少女マンガの中で古典としての位置を占めているといえるだろう。

この『エースをねらえ!』の作者・山本美鈴香は、先ほど一章で述べた“花の24年組”の一人である。1970年代になって顕著な伸びをみせる“花の24年組”の作品群は、従来の少女マンガの枠を超えるとともに、複雑な心理描写をうまく表現し始めたことで知られている。そしてそのような風潮を受けて、同じような特徴を持つ画期的な作品がスポーツを題材にしたマンガの中からもあらわれた。その代表が『エースをねらえ!』なのだ。この作中でも、コマ構成の巧みさなどによって、登場人物の内面がうまく表されており、深さを持った作品となっている。

また、『エースをねらえ!』は、テニスの才能を持った女子高校生を主人公にしているというその内容においても、ジェンダーとスポーツを取り上げるうえで有効な資料であると考ええる。まず、女性に向いているとされるスポーツは昔からあくまで女性的な、優雅さ・きれいさなどを競うものであったり、個人競技のものであったりというのが多い。例えば新体操や、バレエ、シンクロナイズドスイミング、フィギュアスケートなどがそうである。それは女性に求められるイメージや社会的行動の特徴の表れだとみることができる。テニスも同様の側

面を持っており、ここで取り上げる『エースをねらえ!』においても、物語の最初の部分では優雅で美しいプレイをする少女が、理想のプレイヤーとして描かれている。しかしこの作品では主人公の少女がテニスにおける「女らしさ」のジェンダーイメージを超える選手として成長する姿が際立って描かれており、女性的な側面だけではない描き方をされていると考えられる。そこで、この章では、「女らしい」きれいなプレイに憧れていた主人公が同性に「カッコイイ」と思われる選手へと成長する様子や描写から、女性に求められているジェンダーイメージの変化をみていく。また、女性の社会行動における協調にも注目したい。そしてふたつめに、この年代のマンガに多く見られる、コーチと選手の間関係についてもみていきたい。一章では、スポーツとジェンダーにおける批判のひとつとして、女性アスリートの業績を小さく見せる作用について述べた。この点に触れながら、この年代のスポ根少女マンガを分析していく。

ここで、『エースをねらえ!』の概要について簡単に紹介する。主人公は女子高校生の岡ひろみ。彼女はテニス部に所属し、初心者であるにも関わらず、ある日いきなり宗方コーチから選手に抜擢され、猛特訓を強いられる。その中、コーチからの熱心な指導を一身に受けるひろみに対して上級生は反感を抱き、ひろみが慕っていた竜崎麗香（通称「お蝶夫人」）からは選手を辞退するように言われるなど、つらいテニス生活が続く。しかしコーチの指導の中、ひろみはその頭角を現していく。その過程には、一つ上の先輩・藤堂との恋のもどかしさや、慕っていたお蝶夫人との離別などがある。やがてひろみは日本代表の一人として大会にでるまでに成長をする。そんな中、コーチである宗方コーチは若くして病死し、ひろみはその悲しみからスランプに陥る。しかし宗方コーチの友人であり、有望テニスプレイヤーであった桂が現れ、新しいひろみのコーチとして彼女を立ち直らせ、ひろみは世界最高峰のウィンブルドン大会への出場権を得る選手にまで成長していく。物語はひろみとコーチの師弟関係を色濃く描き、そして成長していくひろみの姿を様々な登場人物の視点からも描かれている。

◆『エースをねらえ!』山本鈴美香著、テニスマンガ

週刊マーガレット（集英社）1973～1980、単行本全18巻

なお、この章においては、上記の一作品の他に下記の三作品も参考にしていく。これら参考作品の選定方法としてはまず、ほぼ同時期に描かれていること、また『エースをねらえ!』にでてくるようなジェンダーイメージの変化がみられること、コーチと女子選手との関係が描かれていることなどを条件とした。また、以下三作品においては、単行本ではなく文庫本

を参照とした。

- ◆『アタック No. 1』 浦野千賀子著, バレーボールマンガ
週刊マーガレット (集英社) 1968~1970, 単行本全 12 巻 (文庫本 7 巻)
- ◆『アラベスク』 山岸涼子著, バレエマンガ
第一部 りぼん (集英社) 1971~1973, 単行本全 4 巻 (文庫本 2 巻)
第二部 花とゆめ (白泉社) 1974~1975, 単行本全 4 巻 (文庫本 2 巻)
- ◆『愛のアランフェス』 榎村さとる著, フィギュアスケートマンガ
別冊マーガレット (集英社) 1978~1980, 単行本全 7 巻 (文庫本 4 巻)

2-2 女性に求められるイメージと社会的行動

〈女性に求められるイメージ〉

一章で述べたように、スポーツには男性に向いているもの、女性に向いているものが存在する。女性のスポーツとして思い浮かぶものといえば、フィギュアスケート、テニス、新体操、バレエなどがあげられると思うが、これらは共通して優雅さ、繊細さ、美しさなどが求められると思われる。例えば『エースをねらえ!』で登場するお蝶夫人という女性は蝶のように優雅なプレイをするということで多くの少女たちのあこがれの的になっている。ま

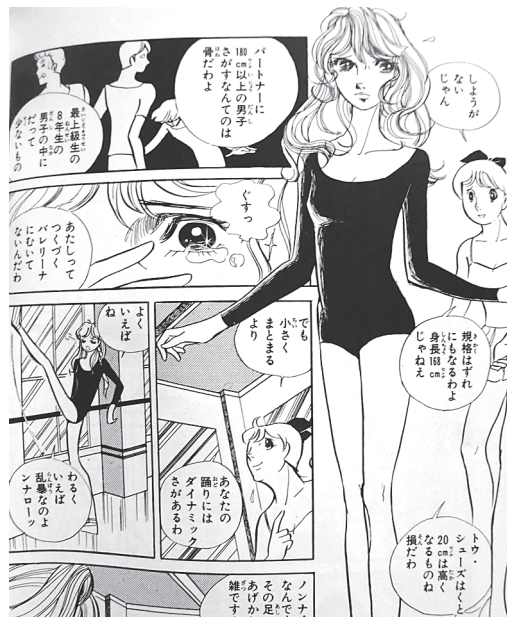


図1. 背にコンプレックスをもつ主人公 『アラベスク』第1巻, p. 10

た、『アラベスク』の主人公ノンナは背が高く、踊りも優雅さというよりダイナミックと言われてしまう自分のバレエにコンプレックスを抱いている。背が低く、繊細さを持つことこそ、一番の理想だという女性像が彼女の意識に深く根付いている様子がわかる。女性アスリートの意識に潜む、根強い女性像について、梅津は次のように述べている。

女性アスリートの多くは、「伝統的な女性性（女らしさ）」を「理想的な女性」の不可欠の条件として認識していると指摘している。ここでいう女性性とは、「かわいい」「優雅な」「色気のある」「献身的な」「愛嬌のある」「言葉使いのていねいな」…といった言葉で表わされているが、こうした特性を欠いている女性アスリートほど低い自尊感情を示す傾向があるという（梅津, 2004, p. 112）。

このように、女性アスリートは自ら自分の理想の女性像を掲げ、常にその概念とスポーツする自分とを切り離せずにいると考えられる。しかし、『アラベスク』のノンナは、最初は自分の背の高さや踊り方にコンプレックスを抱いていたが、コーチの指導により次第にそれを自分の武器として踊るようになる。この彼女が変化していく様子は、理想の女性像である優雅さ、繊細さなどの概念を超え、ジェンダーを超え自分らしさを得られたことだと考えられる。また、『エースをねらえ!』の主人公であるひろみが、お蝶夫人の優雅なプレイに憧れながらも、宗方コーチの指導によって男子のような力強いプレイスタイルに変化する様子もこれと同様である。優雅で華麗なプレイという女性らしさのイメージを超えることで、ひろみは同性からも「カッコイイ」選手として後輩からも見られるようになっていく。このことはひろみ自身が女性アスリートでありながら、伝統的な女性性に縛られずプレイできているということだ。つまり、ひろみは理想の女性像を超えた存在として、彼女自身が持つ女らしさのジェンダーイメージを超えることができたといえるだろう。

この2人の主人公とするマンガのように、70年代のスポ根少女マンガは、女性という性に縛られず、その概念を超えようとする競技をするキャラクターが描かれているのが特徴の一つとしてあげられる。これらは女性らしいスポーツのイメージの越境に挑戦した作品だととらえることができる。

〈女性に求められる社会的行動〉

第一章でも触れたように、ジャーナリストの森田浩之は女性に適したスポーツがあることを著書の中で指摘している。例えばメディアに取り上げられるスポーツは、フィギュアスケート、ゴルフ、陸上、水泳、シンクロナイズドスイミングなどがある。これらの競技には特徴

があり、まず個人競技であること、また相手との身体接触があまりないこと、そして自分のポイントが直接相手のマイナスとなることがないことの3点があげられる。これらのことから森田はひとつの傾向を示している。

女性のスポーツのこうした特徴は、なわとびや石蹴りなど、古くからある女の子の遊びに共通するものがある。たいていはそれぞれの順番を待って遊び、じかに競い合うことはない。自分の成功が別の子の失敗につながることもほとんどない。女の子の遊びは「競争よりも協調」という女性の社会的行動に望まれる特徴の表れとみることができる。こうした特徴がスポーツにも受け継がれているともいえそうだ（森田，2009，p.100）。

女性に根強く残っている協調の意識は知らずのうち女性スポーツにも表れているようだ。実際にはバレーボールやバスケットボール、サッカーなどチーム一丸となって相手チームと対戦していく競技をしている女性チームはたくさんある。しかしそれらがメディアで取り上げられることは実際少なかったし、近年実力をあげている女子サッカーも、その目覚ましい活躍があったからこそ、今多くのメディアで取り上げられるようになったのである。これが10年前であったら今ほどの関心は向けられていなかったのが事実だ。これまでメディアが多く取り上げてきた女性スポーツというのは、女性に向いているという社会のステレオタイプ



図2. 伝統を重んじる先輩部員 『アタック No. 1』 第3巻, p. 282

ブから生み出されたと考えられる。70年代のスポ根少女マンガにはこの傾向がよくあらわれており、バレエ、テニス、フィギュアスケートものはよく見られる。その中でバレーボールは異質なもののだが、当時東京オリンピックで活躍した「東洋の魔女」とよばれる女子バレーボール選手たちの影響が強かったこともあり、これは例外といってもいいだろう。

さて、ここで森田の述べた「競争より協調」という言葉に注目したいと思う。『エースをねらえ!』の中で、ひろみが1年生のうちから実力も伴わないまま選手に抜擢される場面がある。そのあとのひろみへの先輩部員からの批判の声やいやがらせは過激なものだった。「まったくどうして実力もない者が選手になんかえらばれたのかしらねー」、「どうせうらでコーチにとりいったんでしょよ」といった陰口が彼女に聞こえるようにささやかれるのは日常茶飯事である。また、上履きには画鋏が仕込まれたり、さらには慕っている先輩からももらったラケットを隠されたりなど陰湿ないじめを受ける。また、『愛のアランフェス』では、主人公の森山亜季実が特例で選手に選ばれたことに対し、同じ選手の女の子からコーチである父親のひいきのおかげでしょ、と直接嫌味を言われる場面がある。これらの女子のひがみによる行動も、一種の「競争より協調」の精神からきているのだと考えられる。上野千鶴子は女と女のライバル関係について次のように述べている。

「ねたみ・そねみ・ひがみ」は女の属性とされている。そしてそれは醜い。女同士のあいだを引き裂き、相手を蹴落として自分が抜け駆けをしようとする欲望だからである（上野，2010，p.232）。

1年から選手として試合に出るのは例外であり、その例外の選手はまさに「ねたみ・そねみ・ひがみ」の対象である。そのため、彼女たちはチームの協調を乱すひろみを排除せずにはいられなかったのだ。

また、『アタック No. 1』では伝統を重んじる富士見高校女子バレー部に入ったこずえは、その突出した実力から、先輩たちに目の敵にされる。キャプテンの大沼は入部してきた1年のこずえたちにはっきりとこのように述べている。「たとえ実力があっても規律を乱す者は百害あって一利なし!! 私たちの敵よ!!」（『アタック No. 1』第3巻，p.282）後輩たちと切磋琢磨というよりも、まずは規律・しきたりに従えという協調の精神がとても表れているセリフである。

まとめると、70年代のスポ根少女マンガは、女性の社会的行動がスポーツにも反映されていることをよく表していると考えられる。女性がチームで協力するとこのような問題が起

きるよ、でも結果的に協力できるとこんなにもすばらしい結果が出せるのよ、というような女性スポーツの縮図が描かれているのである。結局その「協力」とは、女性の中で特に才能の抜きんでた者が一人で伸びていくこと、女性に許された枠組みを超えていくことを妨げているのだ。『エースをねらえ!』のひろみや『アタック No. 1』のこずえは、そうした女性スポーツの強調の理想を破壊する存在として、チーム内の同性から疎まれるシーンが何度かある。70年代のスポ根少女マンガのひとつの特色として、敵チームとの対戦の他に、少女たちはまず内輪の少女たちとも闘っていかねばならない。まさに女対女の世界を女性特有の社会的行動と結びつけて描いているのが70年代のスポ根少女マンガの特色のひとつだといえるだろう。

2-3 男コーチに支えられる少女たち

『エースをねらえ!』の岡ひろみは、宗方コーチに才能を見いだされてテニスの腕を上達させていく。それゆえにひろみのコーチへの信頼は相当なものである。最初は実力もないのに選手に選ばれたということで、周りの先輩部員からひどい中傷を受け、選手に選んだ宗方コーチを憎む場面もあった。しかし、ひろみはそれを乗り越え、ついには「コーチののぞむ



図3. 宗方コーチを信頼しきるひろみ 『エースをねらえ!』第3巻, p.58

とおりの選手になりたい!』と一心に練習するようになっていく。ひろみが宗方コーチへ絶対の信頼をおいていると感じられる印象的な場面がある。単行本3巻の関東大会の準決勝で、ひろみは前の試合で怪我した膝の痛みからコートに倒れてしまう。もう立てないという状況になったとき、ひろみは真っ先に宗方コーチを振り返った。そしてコーチの言葉を思い出し、再び立ち上がりプレイを始めるのだ。この場面できかに宗方コーチが彼女の精神面までもサポートしているのかがわかる。

また、同じように、『アタック No. 1』ではコーチを求める少女たちが描かれている。高校2年生になった主人公の鮎原こずえは、部員と共に春の選抜優勝大会、つまり春の高校バレーで優勝を目指す。監督やコーチがいなくても彼女たちは見事にこの大会で優勝を果たした。その後すぐ、運良く昔のコーチだった本郷先生にもう一度コーチをしてもらえることになり、彼女たちはたいへん喜ぶ。それまでキャプテンであり、コーチ兼監督であった大沼さんは「私も不安だったのよ…全国優勝しながらこのあとをしめていく監督がいなくてね…」(第6巻, p. 253)と言っている。また、こずえ自身も「やっぱり監督がいなければなにか不安を感じるわ」(第6巻, p. 257)と監督の存在を求めている。彼女たちは全国の高校バレーのトップに立っておきながら、なお監督の存在を求めているのだ。

さらにバレーマンガの『アラベスク』では、主人公とコーチの関係は恋にまで発展している。そのため、主人公の描かれ方は、よりコーチに依存したものになっている。バレーのコーチとプライベートの関係が混同し、コーチの一挙一動が彼女のバレーの表現や感情に大きな影響を与えている様子が描かれている。

このようにスポーツをする少女たちにとって指導者は欠かせないものであり、ときとしてその存在は少女たちの精神面まで深くサポートすべき存在として描かれている。実際に選手とコーチの厳しい師弟関係を体現しているものとして、1964年の東京オリンピックの女子バレーボールがある。東洋の魔女と言われた日本女子チームと監督との練習はとてすさまじいものであったそうだ。キャプテンの河西は監督との関係をこう述べている。

わたしたちは、それぞれ、いろいろな思いで、先生を信じ切っていた。あるときは父親であり、あるときは兄であり、あるときは恋人でもあった。そんな気持ちでなくては、先生についていけるものではない(谷口, 2007, pp. 127-128)。

また、監督の厳しい練習方法に対しての世間からの批判には、次のように述べている。

「なんであんなすさまじい練習をしてまで、勝たなきゃならないのだろう」そういう

ムードは、あのころの世間には、たしかにあったように思う。それに対する答えとして、わたしたちは協会の人に答えた。「わたしたちは、先生のためにやっているんですよ。だって先生は、わたしたちのためにやってくれるんですもの」と。日本の誇りのために、という気持ちがないわけではない。その根底には、日本人としての自覚は十分にあったつもりだが、「先生のためにやる!」といったほうが、わたしたちとしては、切実感があったのだ（谷口, 2007, p. 128）。

このような師弟関係は結果的にその後のスポ根少女マンガにも大きく影響し、ひたすらコーチについていき、厳しい練習に耐えしのでいく少女たちが多く描かれている。そしてこの厳しい練習、特訓というのが70年代のひとつの特色だと考える。それまでジェンダー・バイアスによって女性には向かないとされるスポーツは多くあった。元々男性に比べ、女性は体力も筋力もない。また子供を産むという神秘的な役割もあり、どこまで女性の身体はスポーツに耐えられるのかという疑問があった。ジェンダー論学者の伊藤公雄は女子長距離選手の例をあげて次のように述べている。

今ではスポーツ中継でも大人気の女性のマラソンも、ほんの最近まで男性だけに許された競技だった。1968年のボストン・マラソンで、男装して参加した女性が完走するというハプニングが、「女には長距離は苛酷すぎる」という「常識」を事実の裏づけでひっくりかえしたのだ（伊藤, 1999, p. 117）。

東京オリンピックで女子バレーボールの監督を務めた大松監督はこれと同じようなことを成し遂げたといえるだろう。女性には苛酷すぎる練習を行い、世間から非難されながらも、この練習方法が彼女たちのためになり、結果としても東京オリンピックで金メダルをとることができた。この成功から、そのスパルタの練習方法は認められ、また女子というだけでその厳しい練習に耐えられない身体ではないということを証明させたのだ。このことは女性の身体の限界の「常識」を超えたということでもある。

これほどまでに苛酷な練習を続けるためには、選手とコーチの間に能動—受動の関係が不可欠であったと谷口は述べている。先ほども言ったように、選手はコーチに対して父、あるいは兄に対する思いにも似た感情のなかでついていき、それゆえに厳しい環境でも耐えることができたのだ。「『東洋の魔女』たちは、能動—受動の性別による役割分担を体現する一方で、言説を超える身体の強靭さ」（谷口, 2007, p. 136）を手に入れたのだ。つまり、能動的な男性コーチの指導に、女子選手は受動的に従うという関係性が確立していったのだ。女性



図4 女性コーチへの偏った見方 (『アタック No. 1』第2巻, p.128)

の身体の「常識」を超えながら、しかしその背景は男性コーチとの、能動—受動の性別による役割分担から導かれた結果なのだ。そしてこの図式は自然にコーチ・監督というのは男性の役割であるというステレオタイプが決定的に構築されたことを意味する。

例えば、『アタック No. 1』でコーチは女に務まらないと表している場面がある。こずえがコーチの代わりに部員の練習をみることになり、こずえは監督のように部員に対して厳しい特訓をする。その厳しさに次第にメンバーの不満が募り、こずえはチームを追い出されてしまう。そこで顧問の先生である本郷先生は、「女子のバレーは女のコーチではつとまらないときいていたが…」とこずえをコーチにしてしまったことを失敗だったと述べている。(『アタック No. 1』単行本第2巻, p.218)

なぜ女のコーチは務まらないのか。男の本郷先生が行ったのと同じような厳しい特訓をこずえは同じようにしただけである。また、のちにこずえが高校生になるとバレー部の顧問は女性になるが、その際には特に問題もなく部員たちは女性のコーチについていっている。この点から考えると、本郷先生の「女のコーチはつとまらない」発言は一種の女性へのジェンダー・バイアスな見方であり、ステレオタイプな見方であると考えられる。こずえがコーチを務められなかった理由は「同じ部員同士のコーチはつとまらない」というのが正しかったといえるだろう。

また、『エースをねらえ!』の宗方コーチは「男に支えられていない女は弱い プレイにも限界がある」(『エースをねらえ!』単行本3巻, p.68)と述べている。それは男である自分のコーチ能力への絶対の自信と、これが女のコーチでは技術的なことは教えられても、精神的なことまで支えてやることはできないという考え方を意味していると考えられる。やは

りここにもコーチをするのは男性というステレオタイプがみられる。

ここまでみてきたことをまとめると、女性のスポーツが盛んになり、今まで無理だとされてきた競技や練習方法などが女性でもできることを証明されるようになっていったことがまずひとつとしてある。ふたつめに、女性が身体の限界を超えるようになったのは、男性コーチのおかげであり、男性コーチと女子選手の能動―受動の性役割の関係から生み出されたのである。そしてこのステレオタイプは今現在も根強く残っており、女性コーチというのは時として異質なものとして見られることがいまだにあることは否定できない。

では、これまで見て来たようなスポーツにおける女性らしさの超越や女性チーム内の確執といった70年代のスポ根少女マンガの特徴は、30年後、どのように変わっているのだろうか。

第三章 変化するスポーツ少女からみえるもの

3-1 問題提起

この章では2000年以降のスポ根少女マンガ作品を中心にみていく。ただし、参考にする作品の中には、二章で紹介したような作品とは少し違う種類のスポーツ少女のマンガも含まれている。下に記載されている参考マンガ作品の中には、少女マンガ、つまり若い世代の女性を読者層としてターゲットにした作品ではないものがある。いくつかは男性を主な読者層として想定した、少年マンガ雑誌ないし青年マンガ雑誌に連載された作品である。近年の少女マンガにおいてスポーツをする少女を主人公にしているものは、非常に少なくなってきており、少年マンガや青年誌などへとその幅が広がっている。少年マンガにおけるスポ根ものは今も根強く描かれているのに対し、少女マンガにおいてのその数は非常に少なくなってきている。一般にスポーツマンガにおいてよく描かれるのは、努力やチーム同士の結束などの関係性に視点をあてながら勝利へと向かうものであるが、これが主に求められているのは男の世界であると考えられる。高井が言うように、あくまでイメージの話であるが、「男同士の関係性が美化、賛美される傾向が強いのに対して、女性同士の関係」にはそれがないという（高井, 2005, p. 11）。たしかに「男の友情」と「女の友情」という言葉を並べてみたとき、前者の方が爽やかでより結束が高そうだと多くの人が答えるのではないだろうか。もちろん本質的にどうかは定かではない。しかし私の友人のある男性に男同士と女同士の友情の関係性は同じかという質問をしたとき、男同士の方がその距離が近いと答えられた。この概念は実際に多くの人の意識に存在し、自然とその傾向がスポ根少女マンガにも表れているように感じる。スポーツをする青春の感動は少年マンガから得ればよい。

ではスポーツをする少女たちはどこにいったのか。それは、多種多様な物語設定による展

開に向かったと考えられる。例えば清野静流の『POWER!!』（1999～2002）ではバスケットボールをする女の子を主人公にしながら、その舞台は男子校で男装という設定になっている。また、スポーツ少女はその内面が描かれる主人公から、性的対象として「見られる主人公」へと変化している。たとえば、三島衛里子の『ザワさん』（2009～連載中）では高校球児に混ざって練習をする女子高生を主人公にしており、描写は青年向けのちょっとした女体の強調や、エロスが描かれている。この章ではこのようなスポーツ少女を描くマンガ全般の変化を頭に入れながら、論を進めていく。そのうえで参考にするマンガ作品は以下の4点である。

- ◆『紅色 HERO』高梨みつば著、バレーボールマンガ
別冊マーガレット（集英社）2003～2011、単行本全20巻
- ◆『POWER!!』清野静流著、バスケットボールマンガ
別冊フレンド（講談社）1999～2002、単行本全10巻
- ◆『ザワさん』三島衛里子著、野球マンガ
ビッグスピリッツコミックススペシャル（小学館）2009～連載中、単行本11巻
- ◆『クロスゲーム』あだち充著、野球マンガ
少年サンデーコミックス（小学館）2005～2010、単行本全17巻

なお、これらの作品の中でも本章で中心に取り上げるマンガ作品は、高梨みつばの『紅色 HERO』である。この作品を選んだ理由として、近年の少女マンガにおいてごくまれである「スポーツ×根性」を描いていると思われる作品であることと、全20巻という長作であるため、ある程度の読者の支持を得て連載していた作品のひとつであったと考えられることがある。また、本章ではまず始めにスポ根少女マンガの中で男性の描かれ方が変わってきたことを取り上げる。少女マンガの中でリアルな男の世界が描かれるようになってきたことで、少女がその世界から境界線を引かれる様子を見る。続いてホモソーシャルな世界でスポーツをする少女へと視点を移していく。『紅色 HERO』の主人公・のぼらは物語の中でヒーローであるはずの男性たちから何度も拒絶されており、そこには二章で出てきたような最初から優しい男性のヒーロー像はない。また、二章で女性に求められるイメージとしてのスポーツをとりあげ、「理想的な女性」からかけ離れていると感じる少女こそ低い自尊心を表すと述べたが、のぼらはそれらの少女と違う描き方をされている。このような点でその内容においても非常に参考になる作品であると考えられる。

参考にするうえで『紅色 HERO』のあらすじを紹介する。主人公の住吉のぼらは、旅館

の女将の後継ぎとして育てられたが、根ががさつなどと言われるほど女の子らしさからかけ離れていた。そんなのばらが唯一自慢できるのはバレーボールであった。親の反対にあいながらも、バレーボールの名門校へと進学するが、その女子バレーボール部はのばらの親の圧力によって廃部になってしまっていた。それでものばらは自分の力で女子バレーボール部員を集めて部を作る。また、実家から自由になるため、男子バレーボール部の寮で働くが、最初の頃は男子部員から拒絶されてしまう場面もある。そんな中、男子部員の一人と恋愛をし、お互いに高校バレーボールの最高峰である春高を目指し部活に励んでいく。

他のマンガ作品も簡単に説明する。清野静流の『POWER !!』は少女マンガ雑誌に掲載された、男装しながら高校に通う少女の話である。男子バスケットボールに入部した主人公は女であることを隠しながら学校生活を送る。このマンガはスポ根ものというよりはギャグマンガ的な要素を多く含んでいる。三島衛里子の『ザワさん』は青年マンガ雑誌に掲載されている高校球児のマンガである。ただその主人公は都澤理紗という女の子を主人公とし、男子高校球児に交ざって生活する彼女の姿を性愛の対象とする眼差しで描かれている。最後に、あだち充の『クロスゲーム』は少年マンガ雑誌に掲載された、これも高校野球のマンガである。主人公はピッチャーの少年であるが、その彼に野球の魅力を気付かせた存在として、野球部の紅一点・月島青葉がヒロインとして描かれている。

3-2 女性性へ向かう少女

二章でみた作品では、主人公の少女たちがスポーツを通して女性性を超えようとしていくイメージが強かった。女性のスポーツの幅が広がっていくこと、男性でなければ無理だとされてきた練習を女主人公がこなせるようになることなど、女性の強さを表すイメージが強かったのが 70 年代のスポ根少女マンガの特徴であった。それとは変わって、2000 年以降のものは少女から女性になる様子が描かれていると感じられる。



図 5. セーラー服を拒絶する少女 『紅色 HERO』第 1 巻, p. 18

例えば表面的な服装に関して着目する。『紅色 HERO』の主人公・のばらは入学当初から、決して高校のセーラー服を着ようとしなかった。女性性を象徴するセーラー服は自分には似合わないと言い、私服は常にズボンであった。また、『クロスゲーム』のヒロイン・月島青葉と『ザワさん』の主人公・都澤理紗（通称『ザワさん』）は、共に高校球児に交ざって練習する紅一点の存在であるが、彼女たちは、制服はきちんと着るものの、やはり私服でスカートをはいているという場面は一度も出てこず、ジャージや比較的ラフな格好をしている様子が描かれる。この女性のスカートとズボンに関して上野千鶴子は次のように述べている。

スカートほどわかりやすい、屈強の女性性の記号はない。男にはスカートをはく選択肢はないが、女にはスカートもズボンも両方選ぶ選択肢がある。言いかえれば、スカートをはいたとき、女は「女装」を選んでいることになる（上野, 2010, p. 181）。

上野のこの主張をさらに付け足して言うならば、スカートをはくことが女装であるなら、ズボンをはくという選択をする先ほどの彼女たちは、「男装」を選んでいるといえるだろう。〈男装の少女〉については、藤本由香里の論に言及して中村が次のように紹介している。

評論家の藤本由香里は、男装は「少女が〈女性〉になる、女として花開き異性に愛される、その前段階の姿の仮託」であり「性的な存在であることの否定の表現」だと指摘している（藤本, 1998, p. 134）。なぜならば、「女にとって性的な存在であることは必ずしも嬉しいことではなく、時に嫌悪感や恐れをとまなうものである」からである。この意味での〈男装〉は、「ジェンダーの越境」というよりも「女性的なセクシュアリティの保留・先送り」であると言える（中村, 2009, p. 288）。

女になることを拒絶していた主人公のばらは、女性的になる自分を拒否していたと考えられる。しかし生まれて初めて男の子を好きになったことによって、あれほど嫌がっていた制服もいつの間にか自然と着るようになっていくのだ。また『POWER !!』においては、主人公の少女が完璧に男装し、男子寮に入ってバスケットをしている。

この男装する少女に読者が魅力を感じるのには、少女が抱えるジレンマを突き抜けているからだと言われている。少女は常に〈おませ〉か〈おくて〉かのジレンマにはさまれている。〈おませ〉は異性と付き合うことで、友人間の評価が高いことを呼ぶ。一方〈おくて〉は異性と付き合わないため友人間の地位も低い。よって少女はみな、〈おませ〉を目指せばいいのだが、異性からの性の対象であることを受け入れすぎるとは〈ふしだらな子〉とレッテ

ルを貼られ、娼婦と紙一重になってしまう。これが一般的な少女のジレンマである（前掲, p. 285）。

『紅色 HERO』、『ザワさん』、『クロスゲーム』のヒロインは〈おませ〉ではなく、どちらかという〈おくて〉である。しかし、これらの作品の少女たちは友人間の地位が低いかという、そうではないようにみえる。また、彼女たち自身もそれについてジレンマを抱いているように見えない。これはおそらく彼女たちが女性でありながら、スカートを絶対はこうとしない、高校球児に混ざって野球をする、練習を男子と一緒にするなど、どこか男っぽさを持つことで男装することと同じ作用がなされているからではないかと考える。実際にスポーツをしている女性は、「男性的である」というレッテルをはられやすい。“男装する少女”という少女マンガは、手塚治の『リボンの騎士』から始まり、今でもよく描かれているものだ。しかしこれらの男装する少女のほかに、少女であり続けながらも、スポーツという手段を通してどこか男装の少女を匂わしているというのが、読者を惹きつける魅力のひとつであるといえるだろう。

3-3 男集団と女性の関係

〈少女マンガの中での男の変化〉

二章の70年代のマンガで紹介したスポ根少女マンガと最近のものとを比較すると、まず男性の描かれ方がちがう。二章では女と男の世界が明確に分かれていた。突出した能力を持つ主人公たちは必ず一度は同性である女性と衝突し、男性はそれを無条件に助けてくれる存在として描かれているというのがよくみられる。これはつまり、その時代の少女マンガにおいて男性の存在は遠いものとしてとらえられていたと考えられる。一方最近のスポ根少女マンガの中での男性は必ずしも最初からヒーローではない。スポーツに励む少女に対して優し

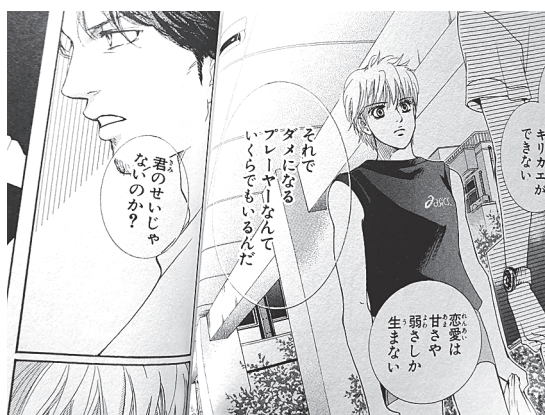


図6. 女 の存在を邪魔だという男子バレーボール部の監督 『紅色 HERO』第6巻, p. 38

く接し支えるというよりも、対等な目線であったり時には厳しかったり、または威圧的な態度で接するなどの場面がみられる。『紅色 HERO』では、主人公・のぼらがなにかと男性に拒絶される場面がみられる。彼女はバレーボールをすることを親に反対されたため、家を出て男子バレーボール部の寮で寮母としてアルバイトをすることになる。しかしそのような彼女を寮生の男子は始めのうち容赦なく拒絶する。中でも印象的なシーンが、のぼらが寮の家事の途中で一人の男子部員にやけどを負わせてしまったとき、他の男子部員から「あんたさもっと他に行くとこなかったの?」（『紅色 HERO』第1巻, p. 118）と、とても辛辣な言葉を言われている。また、物語が進む中でも、男子バレーボール部の中でのぼらを取り合う恋愛が起これると、男子バレーボール部の結束を邪魔する存在にはなるなど、他の男子バレーボール部員や監督から忠告されている。

また、スポ根少女マンガにおいて少女たちのチーム内の結束、友情などが描かれるのと同じように、少年たちのそれも同じぐらいの比重で取り上げられていることにも注目したい。70年代のマンガ、『エースをねらえ!』でも、男性登場人物の中での男の友情がみられる場面はいくつか存在していた。しかしそれがひとつの話の占めるということは決してなかった。一方、『紅色 HERO』の中では、男性登場人物間の結束に関する話題を1巻まるまる費やしているのがみられる。のぼらは男子バレーボール部の熊谷雄信と両想いになるが、それを知ったのぼらのことを好きな同じ部活の灰吹圭介は学校を出てライバル校に転校しようとする。それを雄信が連れ戻すというシーンを感動的に描いているものがある。このとき、決裂の原因を作ったのぼらは、自分の力では連れ戻せないため、雄信にすべてを託している。少女マンガの主人公でさえ、男の中の世界では無力である様子がこのように描かれているのだ。

以上のように、最近の少女マンガの世界には、以前よりも男性の世界が色濃く描かれていると感じられる。このような男の絆や、女性を排除するような男の世界のコミュニティは、社会学では「ホモソーシャル」という言葉を使って説明される。この「ホモソーシャル」を概念化した学者が、アメリカのイヴ・K・セジウィックであり、彼女はホモソーシャルがミソジニー（女性蔑視）とホモファビア（同性愛嫌悪）によって構成されているということ进行分析した（Sedgwick, 1985）。ホモソーシャルな世界でこのように女性が排除されるのはよくあることとして、少女マンガの世界でも描かれている。では少女マンガにおいて男の絆が描かれるようになったのはなぜだろうか。

女子マネージャーという切り口からスポーツ文化のジェンダーについて研究をしている高井は、スポーツをする男性への女性の視線の変化について述べている。

メディアに目を向ければ、一九六〇年代の後半から、梶原一騎を中心としたいわゆる

スポコンものがヒットした。その内容は男同士の絆、友情を美化し、禁欲の価値を強調するものであった。異性愛的欲望が渦巻く社会であるからこそ、禁欲や男同士の友情がさらに魅力的なイデオロギーとなるのだ。

女性たちは戦後まもなくのころまでは、男性スポーツ集団に魅力を感じることはなかった。しかし解放的な時代がおとずれるにつれ、女性たち、特に若い女性たちがスポーツに打ち込む男性集団を性的に意識するようになったのである（高井，2005，pp. 70-71）。

ここでいう「解放的な時代」というのは、1970年代の高度消費社会のピークであり、人々の欲望が渦巻く時代のことを指している。このように解放的な時代の中にあっても、男性アスリートが禁欲的な態度であり続けることは、女性たちにとってその姿はより魅力的にみえたのだ。つまり、少女マンガに男の絆や友情が描かれるようになったのは、読者である若い女性たちがそれを求めているから、というのが大きな要因であろう。そして今、スポ根少女マンガという作品が以前と比べて、その数が減少している要因のひとつはここにみられるように感じる。スポーツにおける「絆」についての男女間の違いを阿部は次のように述べている。

連帯/団結/精神力こそが、スポーツの素晴らしさの神髄 = 美徳であるとされてきたのである。

しかし、そこで想定されている美徳の担い手は、明らかに「男たち」である。もちろん、女性スポーツ選手たちも連帯/団結/精神力を身に付けるべく苛酷な練習を積み重ねているに違いない。だが、私たちが「スポーツにおける友愛」として素朴に思い浮かべるのは、やはり男たちを担い手とした絆ではないだろうか。別の言葉でいえば、実際に存在しているにもかかわらず「女たち」は、スポーツにおける友愛の主たる担い手として表象されていない（阿部，2008，p. 63）。

さらに、人々がスポーツをする女同士の絆に魅力を感じる時というのは男同士の絆に魅力を感じるのとはまた違うというように阿部は述べている。「男たちの絆」に魅力を感じるのは、男性にとっては自分が同一化するべき「男らしさ」であるからだ。一方、女性にとっては異性としての魅力に溢れた「男らしさ」であるからだ。つまり、「男たちの絆」は男女共に魅力的なものとしてとらえられている。しかし競い合い、助け合う「女たちの絆」に対しては、男女共ににとって「女らしさ」という点で魅力は感じられない。女性にとって「女た

ちの絆」は、「女らしさ」という「規範的なジェンダー・イメージに縛られることのない『自分らしさ』を体現している」(前掲, p. 78) から魅力的に感じられるのだ。しかし、男性にとっては「女たちの絆」は性的対象として魅力的でないばかりか、「強く逞しいスポーツをする女性たちの姿は、『女らしさ』からの逸脱であると同時に『男らしさ』への脅威として受け止められかねない」(前掲, P. 79)。これは男性優位の中でどんどん女性が社会進出していく、「護られる存在」だとされてきたジェンダーイメージが壊れることに脅威が感じられているからではないかと考える。女たちの間だけで自立した存在になるということは、男の存在を疎外することになる。男たちの絆に女性が魅力を感じるのにはそこに既存の「男らしさ」を見て取ることができるからだといえるだろう。

このことはマンガの中にも表れており、少年マンガのスポ根の友情や努力に男女共に熱狂することはあっても、少女マンガのスポ根に対して同じように男が熱狂することはない。実際にスポ根少女マンガの中で男性のホモソーシャルな世界が描かれることがあっても、スポ根少年マンガにおいて、少年だけでなく少女のスポーツにもスポットをあて、その絆や友情をも取り上げているというマンガはあまり想像がつかないといえるだろう。

〈ホモソーシャルな場へと飛び込む少女〉

続いて男性集団の中で描かれる少女も変わってきている。男性集団の中で描かれる女性はある程度の女性の役割を果たしてきた。例えば女子マネージャーや応援するヒロイン役としてなど、頑張る男性を応援する女性という役割を持っていた。しかし男性集団の中で性役割を超えた女性たちが登場するようになる。それが女性監督や野球部女子部員である。監督については、二章でも述べたように、その役割は選手たちを能動的に引っ張っていける男性に向いているとされてきた。しかし最近では女性監督を描くマンガ作品も出てきており、これについては藤田由美子が、「スポーツマンガにおけるジェンダー秩序に関する考察—野球マンガにおける女性監督の分析より—」という論文でまとめている。女性監督は男子選手のみ的高校野球部という男の世界に入り込み、男子選手の指導者となっているという二重でのジェンダー越境をしているのだ。

ここでは高校球児に混ざる少女について考える。少女が野球部員として登場する作品として取り上げるのが、『ザワさん』と『クロスゲーム』の2つの作品だ。この2つに共通してみられるのは、ヒロインの少女がどちらも自分の「女」という性をまだ自認してないという点だ。例えば、『クロスゲーム』ではヒロインの月島青葉が複数の男性からあまりにしつこいデートの誘いを受けたため、それならと同じ日にみんなまとめてデートをするということをしている。「遊園地なら大勢の方が楽しいじゃない。にぎやかで」(『クロスゲーム』, 第7巻,



図7. ナルシシズムを欠く少女 『クロスゲーム』第7巻, p.93

p. 93) という青葉の言葉に男性諸君はとまどいを隠せない様子である。

また『ザワさん』では、筋肉を自慢し合う男子部員を見て、ザワさんは自分もと、男子部室に野球用のスライディングパンツのまま押し掛け、惜しげもなく太ももの筋肉を披露する。それに対しての男子部員の反応はザワさんの筋肉を賞賛するものではなく、男の前でそんなかっこうをさらしていいのかという呆れと照れのような反応であった。しかしザワさんはその反応にただ筋肉を自慢したかっただけなのに、と悲しむ(『ザワさん』, 第2巻, pp. 149-150)。

これは私の考えだが、男子部員だけしかいない場に身を置くことはとても勇気がいる。周りは男という自分とは違う異性に囲まれる不安と、また同性から「男好き」と認識されてしまうことやひがみを受けてしまうことへの不安などが無意識に感じられるからだ。実際にそのような女のひがみを表している場面が『ザワさん』の中で描かれている。試合を観戦している普通のOL 3人組が、男子野球部員に交ざるザワさんの存在を見た途端、過剰な批判をする。「女子ならソフトボールでいいじゃんよ、ソフトボールで!!」, 「コイツ単に男の中でチャホヤされたいだけなんじゃないのー!」

ここで、女同士の「ねたみ・そねみ・ひがみ」を描く文芸作家の林真理子について触れた。彼女は恋愛を題材に描いている作家だが、その作品たちは男女の駆け引きや裏切り、ずるさやだましあいなどが描かれ、読者が女への不信任感や嫌悪感を抱かずにはいられないようなものとなっている。上野は、林真理子がなぜそのような作品を書けるのかということにつ



図8. 女のミソジニー 『ザワさん』第1巻, p. 86

いて次のように述べている。

女への悪意に満ちた林の視線を「免責」するものがあるとすれば、それは林が「競争」から降りていること、女の「例外」であるという立ち位置による。競争相手のナルシシズムを、女はけっして許さない。林が欠いているのは、この女としてのナルシシズムである（上野，2010, p.232）。

この女の競争とは、女は男によって選ばれるため、その価値も男によって評価される。そのため、よりいい男とされる男と付き合う女は周りのねたみやひがみなど買う。しかし林は「例外」という立場をとることで、その女の競争から降り、「競争相手が蹴落とされてもその指定席に自分が入り替わる可能性はない」ということを示している。よって林は自らの意志によって「例外」の立場をとることで、女の競争相手からの悪意の視線を逃れることができるのだ。

同じように、2つの野球マンガのヒロインは、女の「例外」の立場をとっていると考えられる。ただ、林と違う点は、彼女たちが自分に女としてのナルシシズムを抱かず、無意識に女の「例外」となっているということだ。実際に2人のヒロインは、登場する他の女の視線

をまったく気に留めていないように感じられる。また、他の女性登場人物も男集団に交じる彼女たちに対して激しい悪意を表していない。これはヒロインたちが自分の女としての性をまだ自認していないこと、言い換えると女としての自分にナルシズムを抱いていないことが大きな要因だと考えられる。そしてそれを周囲も十分感じ取っているのだ。(先ほど述べたOL3人組のコメントはザワさんが女としてのナルシズムを欠いているかどうかを知りえなかったがための反応だと解釈できる。) また、一般に女子は男子より恋愛観の成熟が早い、先ほど述べたヒロインの様子からわかるように、この2つのマンガでは周りの異性ばかりがヒロインを意識し、彼女たちはそれに対してはまったくの無関心である。このことから男子のスポーツ社会に身を置いたときに他の女性の悪意を逃れるためには、「女」として成熟していない段階の少女でなければならないと考えられる。

では、男集団の中でスポーツをする少女は男の視線にどう映るのか。同じくらい練習を分かち合うチームメイトとして彼女たちは男集団に受け入れられているのだろうか? その答えは高井の女子マネージャーの研究から考察したいと思う。

男性集団は、女子マネージャーを下ネタの対象とすることによって、彼女らを性の対象として取り込むと同時にホモソーシャルな集団から疎外しているのである。(中略) このように異性愛が大前提とされている社会では、セクシュアリティの問題が男性集団と女子マネージャーの間に決して超えることのできない「境界」をもたらす(高井, 2005, p. 195)。

また、高井はたとえ女子マネージャーが「マネージメント」に近い仕事をし、男性の役割を果たしたとしても、性の対象とされることで男性集団から排除されてしまうと述べている。

高校球児に交ざる少女たちも同じであると考えられる。少女たちにも、表面的な女性性を表すものとして、容姿が可愛い、色気があるなどの設定が付与されている。例えば『クロスゲーム』の月島青葉は、性格もおおざっぱで負けん気の強い女の子であるにも関わらず、校内ではその容姿のおかげでとても男子から人気のある存在として描かれている。また、『ザワさん』のザワさんはその容姿だけでなく、強調して描かれた胸の大きさも手伝って、野球一筋な性格にも関わらず、野球部員から異性としてとても意識されている。

これはどんなに男っぽい格好をしていようが、競技をしていようが、やはり女性らしさは絶対どこかに存在する、あるいは女性性を社会に求められている、という表現であるように感じる。鈴木は、男性は社会、女性は家庭という分業構造によって男性支配が強化され、その権威が近代スポーツの世界を構築していったと述べている。そして一章で述べたように、

「女は、スポーツの世界での活躍が賞賛されはしても、ジェンダー的な意味で『女らしさ』の規範を兼ね備えていることが要求され、そのため、スポーツにおいて強だけの女は嫌われ、マスメディアによってバッシングの憂き目にさえあうことになるのだ」（鈴木，2001，p. 221）。

このようなことは実際にマスメディアでもよく見られる行為である。最近行われたロンドンオリンピックの女子柔道で金メダルをとった松本薫選手を例としてあげたい。松本選手は試合前に気合いを入れるため、顔をしかめっ面にしていかにも強さを表す表情をしてから試合に臨み、見事勝利した。その表情は彼女なりの気合いの入れ方だったらしいが、メディアではその表情について取り上げられ、その素顔はどのようなものかとテレビで放送されていた。そして彼女の知人のインタビューでは、「普段は笑顔が絶えない」、「気づかひができる女性だ」などのコメントがされていた。気迫のこもった彼女のその表情は、女性らしさとはかけ離れていた点で、メディアにとって取り上げるだけの十分な価値があった。表情やそのプレイの様子から「野生児」、「殺し屋」と言われるほど壮絶な彼女の柔道スタイルは、彼女には女性らしさが内在されているのかという人々の不安を掻き立てるものがあったのだろう。報道ではその不安を拭うため、彼女のプレイのすばらしさだけではなく、彼女の普段の女性らしさをしっかりと報じたのだ。

このように、男っぽいスポーツをする女性は、男の眼差しのメディアによって女性らしさを求められる。阿部はこの男の眼差しが女性の中にも内面化されていると述べている。

「女の眼差し」に映るスポーツ選手は、比喩的にいえば、女性たちから見てカワイイ/キレイであるよりも、むしろカッコイイ存在として憧れの対象となるような女性アスリートの姿にほかならない。つまり、男性の性的な眼差しに照らして魅力的なのではなく、女同士のあいだで成立する共感や連帯に照らして魅力的な存在として女性アスリートを描き出すことこそが、「女の眼差し」に基づくメディア実践にほかならない（阿部，2008，pp. 30-31）。

先ほどの松本選手の報道が「女の眼差し」に基づくものであったら、彼女の普段の私生活から女らしさの強調はいらなかったと考えられる。それに疑問を持たず当り前のように受け止められている女性視聴者は、やはり「男の眼差し」を自分の中にも内在してしまっているといえるだろう。

また、この男の眼差しはメディアの中だけではなく、高校球児に交ざる少女たちにも向けられていると考えられる。男集団と同じ練習をし、行動を共にしても、少女は男性のセクシュ

アリティによって性的対象とされてしまう。したがって彼女たちは男集団のセクシュアリティの問題によって、異性愛の対象と見られることは避けられない。男集団の中に入るというジェンダーを超えられたとしても、結局はセクシュアリティによって男集団から排除されてしまっているといえるのだ。

終章

4-1 各章のまとめ

第一章では本論文のテーマであるスポーツとジェンダーの関係性をまとめ、さらに題材とするマンガをなぜ研究材料として取り上げるのかということを書いた。近代以前は、性はすべて生物学的なものと考えられ、自然に決められているものと考えられていた。しかし1960年代より、性は自然に決められる「セックス」と、社会によって作られる性役割の「ジェンダー」、そして同じ社会的に作られる性愛の「セクシュアリティ」という3つに分けられるという考え方があらわれてくる。人間の性が自然なものではなく、作られたものならば、性役割や性愛の対象は人によって違っていいものはずだ。しかし実際は、ジェンダーという区別が2つの性にはっきりと分けてしまうことで、差別や排除につながっていることが問題として挙げられた。そしてその問題はスポーツの中にも現れているということで、森田の批評を3つの点から書いた。それが女性アスリートの① 幼児化・性愛化、② 周縁化、③ 矮小化である。

また、一章ではマンガが他メディアと比べ、より一つ一つのシーンを共有しやすいこと、より豊かな発想や欲望を表しやすいことを書いた。これにより、人気マンガを題材に社会を考えることは、多くの人の潜在的な欲望を考えることにつながるといえ、有効な研究材料ととらえられることを書いた。

第二章では70年代のスポ根少女マンガからみえてくる傾向を3点にまとめた。

まず、女性はスポーツにおいても女性らしいイメージを求められている。例えばかわいさ、優雅さ、繊細さなど女性ならではのものである。しかし『エースをねえ!』の主人公であるひろみや『アラバスク』のノンナは、コーチの特訓により女性らしさに縛られない自分らしい競技をする。これは彼女たちが女性性に縛られず、その概念を超えた選手として描かれていることを示している。つまり女性のスポーツのイメージの越境に挑戦した作品が描かれていることが70年代の特徴のひとつだ。

また、女性はスポーツにおいて、社会的行動も求められる。「競争より強調」に重きを置く女たちは、その枠組みをはずれる才能のある者を拒絶する。『エースをねえ!』のひろ

みや『アタック No. 1』のこずえはチーム内の同性から「ねたみ・そねみ・ひがみ」の対象とされ、抑圧される様子が描かれている。この女対女の世界を色濃く描いているのが2つめの特徴だ。

そして3つめに、男コーチの絶対的存在が描かれていることだ。少女たちは男コーチによる特訓のおかげで、これまで無理だとされてきた練習やスポーツができるようになってきた。それは女性スポーツの幅が広がったという点で男女の差がなくなってきたように感じられる。しかしその一方で男性コーチと女子選手の能動―受動という性役割が概念化され、それが今日にも影響を与える構図となってしまった。

第三章では2000年以降のスポーツ少女を描くマンガを扱った。ここでも3つの点にその特色をまとめる。まず『紅色 HERO』、『ザワさん』、『クロスゲーム』の3作品のスポーツをするヒロインに共通しているのは、みな男装の少女を連想させるという点だ。これは表面的な服装の色気のなさだけでなく、スポーツという手段を通して、自立や力強さなどの男性性のイメージが表れやすいからだと考えられる。

2点目に、少女マンガでホモソーシャルな世界をより濃く描くようになったことがあげられる。ここで少女マンガには男の友情が描かれるが、少年マンガには女の友情が描かれにくいという非対称性がみられる。これは男の友情が男女双方にとって魅力的に映るが、女の友情は女性には受け入れられても、男性にとっては脅威であるからだと考えられる。そしてスポ根少女マンガの数が減少しているのもこれが要因のひとつだと私は考えている。これについてはまた次の節で述べる。

最後に3点目はホモソーシャルな場へと飛び込む少女が描かれている点だ。高校球児に交ざる少女たちは、女としてのナルシズムを欠いていることで、男集団に入ることに一見成功しているかのように見える。しかし、男集団からのセクシュアリティの対象とされてしまうため、そこには依然として男と女の境界が存在しているのだ。

以上が一章から三章までのまとめであり、次からは考察をすすめる。

4-2 考察①〈女性アスリートのあり方は変わったか〉

まず始めに触れた、スポーツの中でジェンダーの問題とされる女性性差は存在するか、を考える。結論から言うと、スポーツにおける女性性差は依然として根強く残っていると私は考える。第二章では、それまで女性の身体には無理だとされてきた競技や練習が、女性たちにもできるのだということのみてきた。男らしい力強いプレイをする『エースをねえ!』のひろみや、ダイナミックな演技を女らしさではなく、自分らしさの演技に変えた『アラベスク』のノンナのような主人公がその例である。このことから、女性の性役割を超えて自分

らしさを体現する女性アスリートを描くことによって、ジェンダー越境への挑戦がされていたことがみてとれる。

また、第三章でスポーツをする少女は、少女マンガだけではなく、青年誌や少年マンガにも登場し、男集団の中に交ざるようになる。例えば高校球児は、以前女は参加できない領域であった。女子マネージャーであっても全国大会でのベンチ入りさえ1996年前まで認められなかったほどだ。この点で女性にはできないスポーツは次第になくなってきているという二章の70年代の流れが続いているように感じる。しかし、ここで着目したいのはそこに境界がなくなったわけではないということだ。むしろ男集団の中に入っていきこうとすることでその境界は色濃く表れるように感じる。

例えば「紅色 HERO」の主人公のばらが男集団の大学のバレーボール部で練習をさせてくれと頼んだ時、女が自分たちの練習についていくことはできないと拒絶される。そしてのばらはビーチバレーで特訓をするチームに受け入れてもらえるが、そのチームは男集団でありながらも、その中には中学生やサラリーマン、おかまが交ざっているという奇妙なものである。この設定を見るだけでも、男集団の中で女がスポーツすることの難しさを感じる。ビーチバレーボールのチームは年齢にも、性にも寛容であり、そのためこのばらが仲間として受け入れられることができた。つまり、女を受け入れることができたのは、性の境界がないという土台があったからこそできたのだと考えられる。実際にビーチバレーボールのチームの中でのばらがセクシュアリティのある眼差しで仲間から見られる様子はまったく描かれていない。

一方、『ザワさん』のザワさんや『クロスゲーム』の青葉のように、男子高校球児というひとつの性しかない男集団の中では、彼女たちはほか部員からのセクシュアリティの眼差しを避けることができない。同じ練習をし、仲間として一見受け入れられているようだが、少女たちはときとして「カワイイ」存在として認識され、意識されてしまう。そのためスポーツの種目の境界がなくなったというのはあくまで表面的なものだけであると考えられる。

実際に、70年代のスボ根少女マンガは、女性自身の内面のジェンダー越境を試みている作品であった。伝統的な女性役割やイメージとスポーツをする女性の間にはときとしてジレンマが生じることを述べたが、70年代のスボ根少女たちはこの葛藤を超越する存在として描かれていた。しかし、2000年代の、少女のスポーツマンガの方向は、女性から自分らしさへ、というよりも、少女から女性へという方向に向かっている。2000年以降に描かれたスボ根少女マンガ、『紅色 HERO』では、のばらは作中で男装の少女から女性へと成長していく様子が描かれている。『ザワさん』や『クロスゲーム』のヒロインも野球一筋の性格が男っぽさを匂わせるが、そこには必ず容姿のかわいらしさなどが強調されている。これは少女マ

ングにおいても少年マンガにおいても、女の子はどんなスポーツをしていても、女性らしさがあるし、女性らしさがなくてはいけない、ということの意味しているのかもしれない。

その意味で、一度は伝統的な女性のイメージの超越を試みたが、スポーツ少女たちがそれを超えることはやはり難しく、そして社会からも女性アスリートのジェンダー越境は拒絶されていると考えられる。

4-3 考察②〈スポ根少女マンガが消えたわけ〉

第二に、私が論文を進めるうえで気になったことがひとつある。それは、なぜスポ根少女マンガが少なくなってきたのかという点である。ただ、まったくなくなったというわけではない。最近ではなぎなたというスポーツを題材にした、ごさき亜衣の『あさひなく』や、百人一首をスポ根風に描く末次由紀の『ちはやふる』などの作品も描かれている。また、少女マンガの中で男の子が主役のストーリーを描く羅川真里茂の『しゃにむにGO』なども存在している。しかし、やはり70年代のような、人気スポーツを描き、多くの読者を惹きつけたようなスポ根は、少女マンガでは描かれていないと感じる。それはスポ根というジャンル全体の衰退かということ、そうではない。少年マンガでは根強く、野球やバスケットボール、サッカーなどのスポ根ものが、時代を超えても描かれ続けている。ではなぜ少女マンガでは衰退してしまったのか。

70年代では周りの人たち、コーチや恋人となり得る異性に護られながら主人公が女を超越する姿が描かれてきた。そしてこの作品たちを機に、次は女たち同士で自立し、助け合いながら勝利を目指す、というストーリーのマンガに向かわなかったのはなぜか。それは3-3で述べたように、男性にとっては「女たちの絆」は性的対象として魅力的でないばかりか、「強く逞しいスポーツをする女性たちの姿は、『女らしさ』からの逸脱であると同時に『男らしさ』への脅威として受け止められかねない」（阿部，2008，P.79）からだと考えられる。つまり、女は男の絆に「男らしさ」としての魅力を感じられるが、男は女の絆に脅威を感じてしまう。これにより、スポ根少年マンガは男女ともに読むが、スポ根少女マンガを男は読まないという構図ができる。この構図がスポ根少女マンガの市場の狭さを招き、衰退に至ったのではないかと考える。

しかしここで、少女マンガの流れを一章で紹介した際、藤本は最近の少女マンガの特徴として、女性どうしの絆を描くような作品も関心を集めていると述べていた。具体例をあげると、矢沢あいの『NANA』がそうである。この作品は女の絆を表しながらも、以前朝のニューズ番組で特集があったほど人気を集めた、男女共に読まれている作品である。この女の絆の少女マンガと、スポ根少女マンガの違いを考えたとき、やはり後者には女の絆に加え、逞し

くスポーツをする女性も描かれていることが大きいと考える。つまりスポ根少女マンガは男性にとって「女の絆+スポーツ」という二重脅威を示していると考えられる。

また、先ほど3-3で述べたような「男の眼差し」を女性も内面化していることもあり、女性たち自身が、二重脅威となる自分を避けているとも考えられるだろう。そのため、女性たちは男性にはない視点を適度に入れながらも、どこかで「女らしさ」（かわいさ、きれいさ）を保持することで、男性に脅威を与えるような危険なリスクを踏まないようにしたのだ。つまり、ジェンダーのステレオタイプを作っているのは、男性だけでなく、自己保身をはかる女の側でもあるのだ。

これにより、スポ根少女マンガは、男にとっては護る対象がいいため、女性にとっては自己保身のため、次第に関心を得られなくなっていったと考えられる。そして、70年代に描かれたスポ根少女マンガはその後次第にその数が減っていったのだ。

男女雇用機会均等法が始まった70年代、女性は社会進出する風潮に胸を躍らせていたかもしれない。しかしそれから30年経ち、女性たちは社会で働く自分たちに限界を感じているのではないか。私自身が就職活動をした際に出逢った、ある旅行会社の女社長の言葉が今も私の心に残っている。「男性は結婚してそのあとどうするか、を悩まない。けど女性は違う。世の中はやっぱり女性に厳しい。」70年代の、「男性のようにがんばる」だけでは通じない。それに気付き始めたのが今であり、女性がときには自分らしい視点で、ときには女性らしい視点で、うまく生きていこうと模索しているのが現代なのかもしれない。

今後、スポーツ少女はどのように描かれていくのだろうか。見られる対象として、これからも青年誌や少年マンガにその幅を広げていくのだろうか。それとも、女性はその性に縛られず、妥協なしにスポーツと向き合う、70年代のような一世を風靡するスポ根少女マンガが描かれることがあるのだろうか。もう一度そのような作品を求める女性たちが出てくるかもしれない。私個人としては、後者のようなスポ根少女マンガがあってもいいと思うし、女性の絆に感動が得られるような作品にぜひとも出会いたいと思っている。

文献一覧

- 阿部 潔, 2008, 『スポーツの魅惑とメディアの誘惑——身体/国家のカルチュラル・スタディーズ』, 世界思想社
- アン・ホール著, 飯田貴子・吉川康夫監訳, 2001 『フェミニズム・スポーツ・身体』, 世界思想社 (*Feminism and Sporting Bodies: Essays on Theory and Practice* by M. Ann Hall)
- 飯田貴子, 2004, 「スポーツのジェンダー構造を読む」 飯田貴子・井谷恵子編集, 『スポーツ・ジェンダー学への招待』, 明石書店
- イヴ・K・セジウィック著, 上原早苗・亀澤美由紀訳, 2001, 『男同士の絆 イギリス文学とホ

- モソーシャルな欲望』, 名古屋大学出版会
 (Between Men : English Literature and Male Homosocial Desire by Eve Kosofsky Sedgwick, 1985)
- 井谷恵子, 2004, 「スポーツにおけるジェンダー構造の現状を見る」 飯田貴子・井谷恵子編集, 『スポーツ・ジェンダー学への招待』, 明石書店
- 伊藤公雄, 1999, 「スポーツとジェンダー」 井上俊・亀山佳明編集, 『スポーツ文化を学ぶ人のために』, 世界思想社
- 伊藤公雄, 2008, 『新訂 ジェンダーの社会学』, 放送大学教材
- 上野千鶴子, 2010, 『女ぎらい——ニッポンのミソジニー』, 紀伊國屋書店
- 梅津迪子, 2004, 「女性スポーツの商品化」 飯田貴子・井谷恵子編集, 『スポーツ・ジェンダー学への招待』, 明石書店
- 押山美知子, 2007, 『少女マンガジェンダー表象論〈男装の少女〉の造形とアイデンティティ』, 彩流社
- 国広陽子編集, 2012, 『メディアとジェンダー』, 勁草書房
- 斎藤美奈子, 1998, 『紅一点論—アニメ・特撮・電気のヒロイン像』, ビレッジセンター
- 鈴木守, 2001, 「近代スポーツとジェンダー」 鈴木守・山本理人編著, 『講座 現代文化としてのスポーツ II』, 道和書院
- 高井昌史, 2005, 『女子マネージャーの誕生とメディア——スポーツ文化におけるジェンダー形成——』, ミネルヴァ書房
- 谷口雅子, 2007, 『スポーツする身体とジェンダー』, 青弓社
- 中島梓, 1991, 『コミュニケーション不完全症候群』, 筑摩書房
- 中村桃子, 2009, 「なぜ少女は自分を『ぼく』と呼ぶのか」, 『新編日本のフェミニズム 表現とメディア』, 岩波書店
- 夏目房之介, 1997, 『マンガはなぜ面白いのか その表現と文法』, NHK 出版
- 藤枝滯子, 2009, 「絵本にみる女(の子)像・男(の子)像」, 『新編 日本のフェミニズム 7 表現とメディア』, 岩波書店
- 藤田由美子, 2010, 『スポーツマンガにおけるジェンダー秩序に関する考察—野球マンガにおける女性監督の分析より—』, 九州保健福祉大学研究紀要 12 : 69~78
- 藤本由香里, 1998, 『私の居場所はどこにあるの? 少女マンガが映す心のかたち』, 学陽書房
- 藤本由香里, 2009, 「I マンガの歴史 6 少女マンガ」 夏目房之介・竹内オサム編集, 『マンガ学入門』, ミネルヴァ書房
- 前川直哉, 2011, 『男の絆——明治の学生からボーイズ・ラブまで』, 筑摩書房
- 増田のぞみ, 2002, 「拡散する時空——コマ構成の変遷からみる 1990 年代以降の少女マンガ」, 『マンガ研究 vol. 2』, 日本マンガ学会
- 宮原浩二郎, 2001, 「知的触媒としてのマンガ」, 宮原浩二郎・荻野昌弘編集, 『マンガの社会学』, 世界思想社
- 森田浩之, 2009, 『メディアスポーツ解体〈見えない権力〉をあぶり出す』, NHK 出版
 『新編日本のフェミニズム 表現とメディア』 2009, 岩波書店

〈マンガ作品〉

- あだち充 (2005~2010) 『クロスゲーム』 全 17 巻, 小学館
- 浦野千賀子 (1968~1970) 『アタック No. 1』 全 12 巻, 集英社
- 清野静流 (1999~2002) 『POWER !!』 全 10 巻, 講談社
- 高梨みつば (2003~2011) 『紅色 HERO』 全 20 巻, 集英社
- 榎村さとる (1978~1980) 『愛のアランフェス』 全 7 巻, 集英社
- 三島衛里子 (2009~連載中) 『ザワさん』 全 11 巻, 小学館
- 山岸涼子 (1971~1973, 1974~1975) 『アラバスク』 全 8 巻, 集英社, 白泉社
- 山本鈴美香 (1973~1980) 『エースをねらえ!』 全 18 巻, 集英社